

## § 2 民族と宗教

### 1 民族と人種

民族...言語・宗教・社会習慣などの文化的要素によって分類された人間の集団で、自分たちは同一の集団に帰属するという意識をもった人々のこと。宗教や言語は、民族を強く特徴づける。

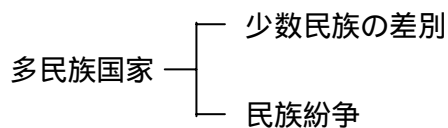
人種...皮膚の色・毛髪の色や形状・平均身長や身体各部の形状など、遺伝的体の特性によって、便宜的に人類を区分したもの。人種の区分は、しばしば白人による人種差別に利用されてきた。

### 2 民族をめぐる問題

#### 1 民族と国家

民族国家...ヨーロッパでは、民族自決などの考え方により、民族ごとに国家を形成してきた歴史がある。しかし、それでも各国に少数民族(ユダヤ人など)が存在する。一つの民族が、いくつもの国家にまたがって居住する場合、それぞれの国家でマイノリティー(少数派)となり、独自の国家をもてないこともある。

他民族国家...複数の民族で構成される国家。ほとんどの国家がこれにあたる。民族のあいだで、文化・人口・経済力・政治支配の関係などで差異がある場合、民族対立が生じやすい。



- 2 民族紛争...民族のきずなが非常に強く、感情的にあおられやすい面がある。そのため、他の民族に対して一致して対抗し、紛争になることが多い。

### 3 宗教

- 1 民族宗教...特定の民族内部でのみ信仰される宗教。世界宗教に対する語。民族の団結に役立つが、ときに排他的・独善的な傾向におちいる。

・ユダヤ民族のユダヤ教。日本の神道など。

- 2 世界宗教...単一の民族だけでなく、多くの民族に共通して信仰される宗教。神話や呪術などの拘束から解放され、民族の壁を超えた普遍的な教義と創始者をもつ。仏教・キリスト教・イスラム教がこれにあたる。三大(世界)宗教という。

### 4 三大宗教

#### 1 仏教

仏教の開祖カウタマ=シッダルタ...カウタマ=シッダルタは、現在のネパールにシャカ族の王子として生まれた。恵まれた生活のなかで次第に人生の無常を思い悩み、真実の生き方を求めて苦行する修業者となる。しかし、苦行という方法に対して疑問をいただき、菩提樹の下で静かに坐禅して悟りを開き、ブッダ(仏陀)となった。

・「ブッダ」とは、「真理に目覚めた者」という意味で、仏教をおこしたゴータマ=シッダ

ルタが悟りを開いてからつけられた尊称である。

ブッダ(仏陀)の悟り...ブッダの思想は、人生はすべて苦であるという認識(一切皆苦)から始まっている。ここでいう苦とは、「老・病・死」のように、人生において避けようとしても思い通りにならない苦しみを指す。ブッダによれば、このような人生の苦は、人間がこの世の真理について正しい知恵をもたないでいることに由来しているという。

- ・縁起の法...ブッダは、すべての存在は「縁あっておこる」(縁起)ものだと説いた。万物は互いに依存しあっていて、それだけが切り離されて成り立っているものではないということ。
- ・慈悲の心...ブッダは、人間のみならず、すべての「生きとし生けるものへの慈悲をいつくしみ」と「あわれみ」。

「縁起」は、四法印の形に整理して説かれた

四法印とは、「諸行無常」(すべてのものは常に変化し、とどまることがない)、「諸法無我」(何ひとつとして不変の実体である我をもつものはない)、「一切皆苦」(この世のすべてが苦しみに満ちている)、「涅槃静寂」(苦を脱して理想的な安らぎの世界)の4つのこと。

- ・人間が苦に悩む原因...人間の多くは、ひとりよがりな考えにとらわれ(我執)、それによってひきおこされる渴愛(貪り)や怒りなどの煩悩であり、我執は真理について無知であること、無明によって生ずるという。

ブッダの思想...苦に満ちたこの人生をいかに生きるかという実際的な問題意識から出発しているのがあって、本来の仏教(原始仏教)は、きわめて現実的な認識と実践の哲学であったといえる。

## 2 キリスト教

キリスト教...ユダヤ教を母胎として成立したキリスト教は、ユダヤ教の聖典『旧約聖書』と、イエスの教えを記した『新約聖書』を聖典とする。

原罪と救い...キリスト教における人間観の特色は、人はみな生まれながらにして罪深い存在である、と考える点にある。このすべての人間が生まれながらに背負っている罪を「原罪」という。

原罪とは、エゴイズム(利己主義)的な欲望のために自己中心的な生き方をしようとし、ときに神を認めない傲慢な自己中心性によって、神に背を向けてしまうことをいう。

キリストと贖罪...キリスト教では、神によってつかわされた神の子イエス=キリスト(Jesus Christ)が、人間の原罪をあがなうため(贖罪)、身代わりになったとしている。

愛の教え...イエスは、神を愛し信仰することの大切さと、隣人愛の大切さを人々に強く訴えた。

隣人愛は、もともと神の人間に対する無償で無限の愛(アガペー)をあたえることであった。神は、すべての人間を平等に愛する。貧困や病などによって恵まれない境遇にある人々であっても、差別することなく、積極的に愛の対象とする。

イエスの死...イエス自身も、抑圧されていた人々の立場に身をおき、ユダヤの律法主十字架にかけられて処刑された。イエスの死に直面した弟子たちは、イエスは、神が人間につかわした救世主(キリスト)であり、死後、神によって復活したと信じるようになった。

### 3 イスラム教(イスラーム)

イスラム教(イスラーム)の世界...キリスト教と同じく、唯一の人格神を信仰する宗教にイスラム教がある。イスラム教は、全世界で10億人以上の信徒をもち、現代の政治や社会の動向にも深くかかわっている。

ムハンマドの伝道...イスラム教は、7世紀の初めに唯一絶対の神アッラーの教えを神秘的な体験を通して、アラビア半島のメッカに生まれたムハンマド(マホメット)に啓示されたことから始まった。

- ・ムハンマドは、神の啓示を伝える預言者というだけでなく、信仰の共同体の宗教的指導者となって布教をおこなった。

#### 『コーラン(クルアーン)』の教義

イスラム教の信者を意味するムスリムは、この神に対してすべてをゆだねなければならない。イスラム教の中心聖典『コーラン』によれば、神の前にあるすべての人は、神の意志に身をゆだね、その教えに従って、正しい行いをすべきであるとされる。神の恵みに感謝し、隣人・同胞は互いに助け合い、尊重し合わなければならない。

「六信五行」の教え コーラン全体の内容をまとめたもの。

- ・六信...神、天使、聖典(啓示)、預言者、来世、天命(宿命)の六つを信じる。
- ・五行...信仰告白、礼拝(1日5回)、布施、断食(ラマダン)、メッカへの巡礼。

イスラム教の拡大...第二次世界大戦後、ムスリムの国々は政治的には西洋諸国からの独立を達成したが、同時に、王政を廃止するなど西洋諸国と同様の道を歩み始めた。しかし、このような西洋的な近代化の方向に反対する人々もあり、ムスリムとしての自覚を強調し、イスラム教の信仰を中心とした政治体制や社会制度を実現しようとする考え方も強くなっており、その動向は世界全体にも大きな影響をあたえている。

- ・イスラム教は、ユダヤ教やキリスト教を同じ唯一絶対の人格神を説くものとみなして教えが完璧な形で説かれるようになったという。

### 儒教

「孝」を重んじる思想...「孝」を重んじる思想を説いてきたのは、孔子にはじまるとされる儒教である。知的な学問としてとらえるときは、「儒学」という。

「四書・五経」などを経典とし、孔子などの聖人を尊ぶ。中国・朝鮮半島・日本・ベトナムなどに普及した。

四書・五経...五経とは、『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』の五つの経典。朱子学や陽明学では、これと別に、孔子や孟子の直接の教えである、『論語』『大学』『中庸』『孟子』を四書とよんで、倫理の指針とした。

『論語』にみる孔子の教え

- ・「孝」...子が親に対して尽くすこと。家族道徳を人間関係の基礎にすえた考え。
  - ・「仁」...「人を愛すること」の大切さを説いた。
  - ・「忠」...「まごころ」と「思いやり」。社会全般の人間関係に使われる。
- 中国・朝鮮半島・日本の思想に影響している。